

黄斑疾患への注射5年で10倍

やまなし

医療最前線

県立中央病院から

網膜の中心部にあり、視力をつかさどる細胞が集中する「黄斑」の病気にに対し、眼球内への「抗VEGF薬注射」が効果を上げ、治療の主流となっている。県立中央病院では治療開始5年で注射件数が10倍に増加。視力改善に即効性が期待できる一方で、継続的な治療の必要性や高額な治療費の負担が大きくなっている。

対象となる病気は、網膜静脈分枝閉塞症や糖尿病網膜症による黄斑浮腫、加齢黄斑変性症。同病院眼科副部長の中込友美医師によると、動脈硬化による静脈閉塞、高血糖に



中込 友美
眼科副部長

早期発見が効果高める

《 141 》

よる血管障害によって網膜に血液成分が漏れ、黄斑がむくんだり、加齢黄斑変性症により黄斑の下に新生血管が生じたりすることが視力低下を引き起こす。

従来は、原因となる血管を焼き固めるレーザー治療が主に行われてきたが、周囲の正常組織にもダメージを与えてしまう問題があった。抗VEGF薬注射は、血液成分が血管外に漏れ出すのを促したり、新生血管を増殖させたりするVEGF（血管内皮増殖因子）の働きを抑える抗VEGF薬を強膜（白目）から眼球内に投与。正常組織を傷つ

けることなく、黄斑のむくみや新生血管の増殖を抑えることができる。

抗VEGF薬は、国内では2009年に加齢黄斑変性症に対して使用が認められ、その後、他の疾患にも適応が拡大。同病院は12年から注射を開始し、16年には12年（24件）の10倍となる291件、17年11月末時点で326件と増え続けている。注射後、数日以内に視力の改善を実感できるケースが多いという。

一方、課題も残る。「効果が続くのは約2、3カ月。病気が症状によるが、継続的な注射が必要になることも多い」と中込医師。注射は1本約15万円、1割負担でも1万5千円と患者の負担は大きく、医療費の増大も懸念される。

中込医師は「注射の効果を上げるにはできるだけ早く異常に気付く、治療を始めることが大事。日頃から見え方のチェックをしてほしい」と話している。

Ⅱ第2、4木曜日に掲載します

